

## 友人に自殺念慮を相談された大学生の対応に関連する要因

—自殺の知識とスティグマに着目して—

古 井 遥

日本において青年の自殺問題は深刻であり、対策が求められている。青年は、専門家や周囲の大人ではなく、友人などの身近な存在に相談しやすいとされている。しかし、相談された青年がどのような対応をとるかについての知見は少ない。また、相談された者が苦慮して自らも追い詰められている事案（「共倒れ」）が発生していることが指摘されており、相談を受けた者に対する支援も必要だとされている。したがって、自殺念慮について友人から相談をうけた青年が、周囲の大人や専門家など他者の援助を受けられることが自殺対応において重要だと考えられる。本研究では、相談をうけた青年がどのような対応をとりうるかを明らかにすることを第一の目的、第三者を関与させた適切な対応を促進する要因について明らかにすることを第二の目的として検討を行った。

まず、第一の目的のために友人から自殺念慮を相談された際の対応について自由記述で調査を行い、KJ法によるカテゴリ化を行った。125名の回答をまとめた結果、2の大カテゴリ、9の中カテゴリ、29の小カテゴリが抽出された。特に多い対応としては、詳細な話をきくことや、相手の話をゆっくりときくこと、自分にとって相手が大切な存在だと伝えることがあげられた。また、専門家の意見をもらいながら抽出されたカテゴリを3つの対応タイプに分類した。自ら積極的な支援を行う「社会的援助」、専門家や周囲の信頼できる人などの助けを得ようとする「第三者の関与」、共倒れや自殺既遂のリスクを高める対応である「不適切な対応」に分類された。今回の調査では、ほとんどの回答者になんらかの「社会的援助」がみられた。一方で、「第三者の関与」を回答した者は全体の約26%であり、これを促進する要因の検討について必要性が強調された。

次に、第二の目的のために、各対応タイプの記述がみられたか否かを目的変数として、ロジスティック回帰分析を行った。「自殺の知識」、「自殺に関するスティグマ」、「ゲートキーパー自己効力感」を説明変数とし、欠損のある回答を除いた101名を対象に検討した。その結果、自殺について賛美／正常化するスティグマの低さ、自殺の知識の高さ、年齢の高さが第三者の関与を促進する可能性が明らかになった。ゲートキーパー研修などによって自殺について議論することや、正しい知識を身につけることの自殺対策における有効性を強調する結果となった。一方で、不適切な対応については有意な説明変数が示されなかった。これは、不適切な対応を回答した人の多くが、自殺に関する経験を尋ねる項目に「わからない／答えたくない」と回答していたことが関係している可能性がある。自殺に関する経験をもつ者のなんらかの葛藤的態度を反映している可能性があり、今後注目して検討すべきだと考えられた。